

第 2 章 地域住民の参画



地域住民の参画の推進

アザメの瀬自然再生事業の大きな特徴は、徹底した住民参加による計画立案・実施を行ってきたことである。事業者が計画立案した後、地元の了解を得るといったこれまでの手法と異なり、双方が積極的に意見を交わし、一緒になって計画を立てていく住民参加型によって事業を進めている。

地域住民の参画を推進する方法として、事業について地域住民を交えて検討する場である「アザメの瀬検討会」を設置し、調査・計画から施工段階、管理に至るまでを話し合いによって決めている。アザメの瀬検討会は、地域住民と国、地方自治体の行政関係者をメンバーに、学識者をアドバイザーとして設立している。

初期段階の検討会は、地域住民の自然再生事業についての関心を高め、参画を促進することを目的に、国土交通省職員による事業の説明会、自然再生に関する専門家による勉強会の形式で実施されている。その後は事業の進め方や構想原案から、整備施設の詳細な整備内容までも検討会で議論し、合意を得た上で進めている。検討会の合意形成のルールは下記枠内に示すとおりであり、住民を中心とし、「みんなで考え、みんなで決める」ことを基本にしている。

このように推進されていったアザメの瀬自然再生事業における住民参加であるが、実際にこれまで関わってきた地域住民や国土交通省職員はどのような意識を持って取り組んできたのであろうか。この「アザメの瀬の記録」を取りまとめるにあたって、第90回アザメの瀬検討会を開催し、当時の関係者の考え方、想いについて伺った。次頁よりその模様をお伝えする。



「アザメの瀬検討会」の合意形成のルール

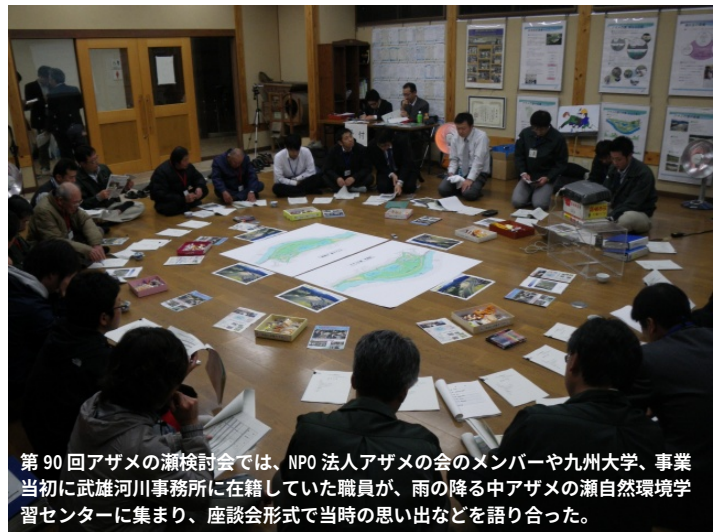
1. メンバー非固定の自由参加の検討会
2. 専門家はアドバイザーとして位置づけ
3. 地元の幅広い知識を吸収する努力
4. みんなで作り上げていく
5. 「してくれ」ではなく、「しよう」が基本
6. 繰り返し、話し合う
7. 進め方も、みんなで考え、みんなで決める

アザメの瀬検討会の仕組みと合意形成のルール

昔の松浦川を取り戻したい！

—第 90 回アザメの瀬検討会—

アザメの瀬自然再生事業では徹底した住民参加による計画立案・実施を行ってきた。ここでは、平成 22 年 12 月 2 日に実施された第 90 回アザメの瀬検討会での座談会の記録や過去の資料などを基に、地域住民の参画についての背景や具体的な方法、また地域住民のアザメの瀬に対する想いを紹介する。



第 90 回アザメの瀬検討会では、NPO 法人アザメの会のメンバーや九州大学、事業当初に武雄河川事務所に在籍していた職員が、雨の降る中アザメの瀬自然環境学習センターに集まり、座談会形式で当時の思い出などを語り合った。

当時を振り返って・・・ 参画に至った背景

アザメの会のメンバーや、当時事務所に在籍していた職員で、アザメの瀬の計画初期の頃の想いや苦労話を語った。

（国土交通省今村氏、以下（今））そもそもは、上流の河川改修を進めていくうえで、この場所に堤防がなかったのが、当時検討を重ねて、堤防を作って構造物を作ってしまうか、それとも全面的に買収をしてその後利活用をしていくかという議論をして、結果的には全面的に買収という形でいこう、ということになった。



国土交通省の今村氏

元々の地元の要望では、アザメの瀬を駐車場やグラウンドにしたいという意見が多く、買収した国側からしても、ここを氾濫原的湿地にすると最初は考えていなか

った。九大の島谷先生が平成 13 年 7 月に全国の河川を調査している土木研究所から武雄河川事務所に来られた。それまで全国的な河川の状況につい



アザメの会理事長の久我氏

て環境の状態が悪くなっていくのを目のあたりにする中で、予算がつくかどうか分からないけど要求してみようということになった。

（国土交通省湯浅氏、以下（湯））自分は平成 13 年度にこの自然再生事業に加わった。当時、再生事業のことを事務所内でもみんな分かってなくて、島谷所長の経験されたことなどを色々勉強してやっていた。一番思い出深かったのは、**東大の鷺谷教授をお呼びして、平成 13 年度の 12 月中旬に自然再生のシンポジウムをやったこと**。それがきっかけとなり、地域の方も興味を持たれて勉強されたと思う。**11 月 6 日に第 1 回の検討会をおこない、平成 14 年の 3 月**

までに頻繁に検討会をやった。地元の方が面白くなってきて、「またやろう」といった感じで頻繁にやっていた。

(今) 当時は国交省が思う事と地域の思う事の開きが大きかったので、最初のスタートを一緒にしないと、いくら「環境が…」といっても伝わらない。そういう考えから当時の所長である島谷先生が**色々なシンポジウムを仕掛けたり、高名な先生を呼んで勉強したりする事で地域の方も「なるほど。最近松浦川の魚も減ってきた」という話になり、じゃあどうやればいいのか？**といった感じで検討会に入っていた。地元の方もどんどん関心が深まっていった。

(アザメの会・久我理事長、以下(久)) アザメの瀬の事業は人命・財産を守るために重要な整備であると認識している。当初は地元の意見がまとまるまで時間がかかったが、島谷先生のはからいと地元の参加があったから実現したと思う。

(アザメの会・梶山氏、以下(梶)) 自分はアザメの瀬から 500m くらい上流に住んでいたんですが、昭和 30 年頃は、松浦川の水が本当にきれいで、泳いだり、魚を捕ったりしていた。ところが昭和 35 年頃に上流の炭鉱の影響で川で遊ぶ事が出来なくなってプールで泳ぐようになった。**この自然再生事業の話があって、**



平成 13 年 11 月 6 日に開催された第 1 回検討会の様子。熱弁をふるう当時の島谷事務所長。

自分が生まれ育った松浦川を昔の川に戻す事ができると思い参加した。

(アザメの会・富田氏) 平成 10 年に佐賀に帰ってきて、アザメの検討会に最初の頃、よく来ていた。**ボランティアが好きで、子供達とよく関わっていた。**自分に出来る事は何か？と未だに考えている。

(アザメの会・大草氏) 後継者がいなくなって、中々大変。地域の地区でも、アザメの瀬にどんどん関わっていかないといけないと話合っている。子供が喜ぶ事が一番。

【参画に至った背景】についてのまとめ

■国側からのアプローチ

地域住民の参画を得るため、初期段階において国側からのアプローチとして以下が実施されている。

①第 1 回検討会（平成 13 年 11 月 6 日開催）

- ・事務所職員による自然再生事業の説明

②第 2 回検討会（平成 13 年 11 月 19 日開催）

- ・「再生事業勉強会」として、萱場祐一氏（自然共生研究センター長）など、自然再生に関する専門家 3 名を招いて勉強会を実施

③河川環境再生シンポジウム（平成 13 年 12 月 9 日開催）

- ・鷲谷いづみ教授（東京大学）を招いてシンポジウムを開催



河川再生シンポジウムの様子

上記のような勉強会、シンポジウムを開催することで、地域住民の自然再生事業についての関心を高めていくことに成功している。

また平成 14 年 1 月には、地域住民の意見を受け、現地見学会および地元長老会への聞き取りを実施している。このように地域住民の反応に柔軟に答え、こまめに参加の機会を広げていったことが、地域住民の参画を促したといえる。

■地域の方々の想い

アザメの会のメンバーからは、参画に至った当時の想いについて、以下の意見が得られた。

- ・事業によって松浦川を昔のようなきれいな状態に戻したいとの思いから参加した。
- ・子ども達とのふれ合い。

このような想いが参画に結びついたのは、初期の勉強会やシンポジウムによって自然再生事業への理解が進んだことが大きい。

事業者と地域との信頼感の醸成の場 アザメの瀬検討会の開催

アザメの瀬の検討の核となる「アザメの瀬検討会」。検討会を重ねることによって、地域住民の事業者に対する信頼感が醸成されていったという。

（今）「頻繁に開催してたので、話すネタを夜中まで考えてた」

（湯） 検討会は何度もやっているうちに**地元の方が面白くなってきて、「またやろう」といった感じで頻繁にやっていた。**

（今） 検討会をスタートして2年目になると20回を超えるくらい検討会をやってきた。

その検討会では、何でも好きなだけ喋っていいといったルールを決めて、決まった事を繰り返して話したり、誰が参加しても良い。あまりガチガチな雰囲気を作らず「僕らも分からないんですよ。」といったスタンスで地域の方々とやっていく。その中で、担当としては、ちょこちょこ顔を合わせてないといけない。**3～4ヶ月に1回しか顔を合わせないと前回何を話したのか分からなくなってしまう。だから頻繁に検討会を開いた。**月2～3回やっていたので、だんだんネタがなくなってくる。その度に夜中考えて、今度は久我さんとイダ釣りに行った時の話や山に登ってみたいとか…**アザメ新聞を1つの武器にして、ずっと発刊するという事と検討会を継続してやっていく。**それに飽きてくると先生を呼んで、また勉強する、という感じで進めていった。

表 2-1 初期の検討会活動経緯

平成13年11月上旬	第1回アザメの瀬検討会
11月中旬	第2回検討会及び勉強会
12月上旬	河川環境再生事業シンポジウム
12月中旬	第3回検討会
平成14年1月下旬	現地見学会、長老会との懇談
1月下旬	第4回検討会
2～3月	第1、2回アザメの瀬代表者検討会
4月	第5回検討会
6月	自然再生シンポジウム
平成14年7月～ 平成15年7月	第6回～20回検討会
平成14年12月	アザメの会発足
平成15年4月	公募研究開始
7月	アザメの会、全国川のワークショップ参加
7月	出立式（通水開始）
8月	アザメの会魚とり、第21回検討会（子供を対象に）

（国土交通省・大塚氏） 今村さんが転勤した後に、「今度の出水期までには、アザメと松浦川を繋げる」ということになった。平成15年6月末を出立式としていたので、4～5月にかけて掘らないといけない。島谷所長と今村さんとみんなで描いた絵しかない状態だったのでどのように現地に示して、施工を行うのが悩んだことを覚えている。特に工事業者の方に絵のイメージを伝えるのが大変だった。

（国土交通省・高瀬氏） 自分はどちらかというと今村さんと大塚さんの後方支援をする立場だった。



国土交通省の大塚氏

なぜ後方支援かというと、自分は計画よりも技術的な方を担当していた。ジオスライサー（地層調査）では 1000 年前の地層が分かった。**他には電気ショッカーを使って魚を調べたり、植物調査を行ったりして、アザメの会と情報共有しながらやってきた。**

（梶） 検討会、最初のうちは 50 名以上参加していたけど、最近では地域の方が参加するのが少なくなったのが残念。自分は小さい時の思い出が焼きついているので、この話が来た時の「やってみたい！」という想いで今も続けている。

子供達が集まって一生懸命やっていると地域の皆さんも必ず戻ってくると信じているし、そうしなければならないと思う。子供達が「あの時自分の故郷にはこんなに素晴らしいものがあったなあ」と語る事ができるようなアザメの瀬をぜひ作っていききたい。

（久）「検討会を重ねるうちに、国に対して信頼感がでてきた」

（今） 担当の時は、みんながどう思っているかが気になった。絶対気持ちをここから離れさせてはいけないと思いながらやってきた。検討会の後に地元の方々に何を話してるんだろう？なんて思っていた。最初は緊張して喋れなかったけど、時間が経つにつれて段々喋れるようになり、みんな聞いてくれるようになり、一緒にやっている感が出てきた。これはこちらからの質問なんですけど、国交省と一緒に事業を進めていこうと思えるようになったのは、国に対する信頼感が出来たのはいつ頃からでしょうか？

（久） 回を重ねる事に信頼感が出来た。一緒に色んな体験を重ねてきた事が印象に残っている。

（梶） 国交省の職員は上からの印象が強かったので、中には武雄河川にうまく利用されているとか言われたこともあった。しかし、**毎月、夜遅くまで付き合ってくれたりして、地域の考え方も変わってきた。**色んな意見も出してもらった。

（アザメの会・山口氏、以下（山）） 行政サイドと住民サイドの意見が合っていないと思うこともある。行政サイドの立場ばかり言われるので、自分たちは、行政サイドの中に入り込んで「こういう風になるん

だ」という検討会もしたけど、ある程度の行政側の押し付けもある。例えば「何m海拔を下げます」と言っても、一般住民の人達は分からない。基本的な事が分からないのに押し付けていると感じることもある。

（今） 押し付けているつもりはないですよ。

（山） しかし、自分たちから見たら、押し付けているようなところもあった。例えばどうして田んぼに魚道を造ったのか、どうして水路の材料に木材を使ったのか等。

（国土交通省添田氏、以下（添）） 魚道を作ったのは、昔は魚が田んぼに入ってきて、産卵して、川に戻っていく流れがあったので、この棚田にも魚がいたら良いといった話もあったこと。また材料は、自然再生事業をやっているのにコンクリートを使いたくないという想いがあったためです。ただ、作ってみて分かったのは、木だと 5 年 10 年たつと腐って穴が開いてくること。

他の場所で環境整備するときには、地域の人に「理想はこうだけど、先々のことを考えるとこんな材料を使うのがいい」などと提案している。ある意味アザメの瀬で培った経験が生きている。



アザメの瀬についての想いを身振り手振りを交えて語るアザメの会の梶山氏

【アザメの瀬の記憶 ～当時を振り返って～】

筑後川河川事務所 泊 耕一

■アザメの瀬の目標は本当はこうやって生まれた！

アザメの瀬が他の自然再生事業と違う所は、“シンボルがない！”という所。じゃあ何をしようか？となった時に、勉強会を始めることになった。目標を見つけることが最初の頃のテーマだった。今のアザメの瀬の目標になっている「河川の氾濫原的湿地の自然再生」と「人と生物のふれあいの再生」という2つのテーマは検討会の中から出てきたもので、元からあったものじゃなかった。



久我理事長とアザメの瀬にて

■船出から波乱含み、でもその先を見ていた

地元からは“運動場がいい”と散々言われ、当時の大草町長が“面白いことやっているから1回話を聞こうよ”と言ってきて、お互いが少しずつ同じテーブルに乗るようになった。節目、節目に大草町長がバックアップしてくれて非常に助かった。それが検討会のスタートだった。

自分はその時も“造った後どうするか？”“地域の人々がアザメの瀬を造って良かったなと思えるにはどうすればいいか？”を常に考えていた。

地元の人が喜んでるのは、計画・設計段階から自分達が携わったこと、関わったからには最後までやらなければいけない、という使命感が芽生えたこと。

■検討会でのエピソード

当時のシンポジウムで事務所が作成した計画図の素案を出したら、その後の検討会で“計画ありきじゃないか！”、“俺達を出しに使っただろ！”とつるし上げられ、肝を冷やした。これで地元の人たちの真剣さが身に染みた。また、検討会ではテーマ毎に分科会を作って個別に議論しようとしたが、参加者は自分の班じゃない方にも興味をもってしまい、最後はぐちゃぐちゃになって頓挫した。やさしいテーマの分科会に入ろうとしたバチが当たったのかもしれないが、これをきっかけに皆で同じテーマを議論しよう、となった始まりでもある。



■昔のイメージに近づいている

平成13年か14年頃、現地に何も出来ていない時に、アザメの瀬の将来の姿をイメージしてイラストを作った。ここにヤナギ、ここにムクノキ、ヤナギが大きくなったら下草のセイトカアワダチソウは無くなって、などと色々考えていた。現在の写真（表紙）を見た時に“イメージしたとおりの姿になってきて正直嬉しかった”。当時地域の人たちもこんな風になったらいいなと言っていたが、もう覚えていないかも知れない。

■これからのアザメの瀬

今のアザメの瀬検討会はイベント＝検討会という形になってしまっていて、昔のような議論をする検討会ではなくなってしまった。検討会自体、高齢化や世代交代等の問題を抱えている。地元の方のやる気を引き出すためにも、武雄河川事務所の職員が積極的に団結して取り組んでいく姿勢が大事であると思う。

【アザメの瀬の記憶 ～貢献者達～】

アザメの会 久我安隆

振り返りますと、アザメの瀬の歩みの中で、今は亡き3名の方の実績ですばらしいアザメの姿となった。

■故 山口 直行 さん（アザメの会 初代会長）

山口さんは、アザメの会の初代会長として地域の方々を盛り上げ、その礎となり、アザメの瀬の取り組みを導いてくれた、当時のアザメの会の歯車の存在であった。

また、皇太子殿下がお越しいただいたときも、会長として対応して頂いたことも記憶に残っている。



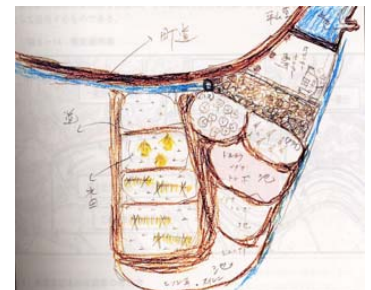
アザメの瀬検討会の発足

■故 松本 等 さん（アザメの瀬の知恵袋）

松本等さんは、アザメの瀬にぴったりの人格だったと思う。

魚から植物まで非常に詳しく、常に、子ども達のためにと、竹竿を作り釣りを教えるなど、教育熱心であった。

また、カレンダーの裏にクレヨンでアザメの瀬のイメージを書いてくれたり、自分で育てた植物をアザメに持って行きたいとの思いを持つなど、事業に対しても非常に熱心な方であった。



松本さん直筆の棚田のイメージバース

現在のアザメの瀬の活動は、子どもなしには語れない。松本等さんは、当時からその強い志をもってあった。



滋賀県立琵琶湖博物館の川那部館長を迎える松本等さん（写真中央）

■故 松本 憲二 さん（子供達がいつもなつく）

松本憲二さんには、子供たちがすぐになついてしまう。本当に子どもが大好きな方だった。

アザメの瀬の活動への参加は、1年間だったが、毎日アザメの瀬に行ったり、奥さんと一緒に活動に参加して頂くなど、いつもアザメを気にかけてくれていた。そのためか、もう何年も一緒に活動しているように感じた。

また、九州川のワークショップでは、子ども達のプラカードも手作りしてくれたりと本当に熱心な方だった。



子供達と一緒に水質調査

【アザメの瀬検討会の開催】についてのまとめ

■計画立案・実施の「核」となるアザメの瀬検討会

徹底した地域住民との対話に基づく計画立案・実施を行っているアザメの瀬自然再生事業において、検討の核となっているのが、アザメの瀬検討会である。地元の町会、小中学校の先生、学識者、関係行政機関を通して検討会への参加を呼びかけており、検討会のメンバーは非固定で自由参加としている。

検討会は平成 13 年 11 月 6 日に第 1 回が開催され、その後、ほぼ毎月 1 回のペースで開催された（詳細は下表のとおり）。検討会へ参加できなかった方には、後述するアザメ新聞を発行し検討会の状況を把握できるようにした。



第 23 回検討会（平成 15 年 10 月 6 日）の様子

表 2-2 アザメの瀬検討会の開催状況（平成 13 年～平成 21 年）

年	検討会の開催状況	回数
平成 13 年	第 1 回～第 3 回検討会	3 回
平成 14 年	第 4 回～第 13 回検討会	10 回
平成 15 年	第 14 回～第 25 回検討会	12 回
平成 16 年	第 26 回～第 36 回検討会	11 回
平成 17 年	第 37 回～第 46 回検討会	10 回
平成 18 年	第 47 回～第 57 回検討会	11 回
平成 19 年	第 58 回～第 64 回検討会	7 回
平成 20 年	第 65 回～第 74 回検討会	10 回
平成 21 年	第 75 回～第 88 回検討会	14 回
合 計		88 回

■検討会の進め方の特徴

検討会の進め方の特徴としては、以下に示す項目があげられる。

- ①メンバー非固定の自由参加の検討会
- ②専門家はアドバイザーとして位置づけ
- ③地元の幅広い知識を吸収する努力
- ④みんなで作り上げていく
- ⑤「してくれ」ではなく、「しよう」が基本
- ⑥繰り返し、話し合う
- ⑦進め方も、みんなで考え、みんなで決める

上記のような進め方であるため、1 回の会合で決まることはわずかであり、また議論は常に流動的に変化したが、「地域住民が主体で何でも話し合って決める」という方針を明確にしたことにより、地域住民の意欲が高まっていった。

■アザメ新聞の作成

アザメ新聞はアザメの瀬自然再生事業の進展を伝えるために、武雄河川事務所の若手職員が編集担当者となって作成した新聞である。平成21年度までに35号まで発行され、また号外も8号まで発行されている。

検討会へ参加できなかった方にも、アザメ新聞を発行し検討会の状況を把握できるようにした。また地質調査やシードバンク調査などの各種調査にも地域住民に参加してもらい、その結果をアザメ新聞で発信していくことで、地域住民の事業に対する関心や意欲が高まっていった。このようにアザメ新聞は情報共有、住民参画におけるツールとして重要な役割を占めている。



アザメ新聞 Vol.6（平成14年8月27日発行）

■検討会が果たした役割

アザメの瀬検討会の果たした役割として、以下が挙げられる。

- ・地域住民との徹底的な対話を行ったことにより、地域住民の意欲が高まった。
- ・回を重ねる中で地域住民の信頼感を得られ、相互理解が進んだ
- ・アザメの瀬の整備に地域住民の意見を取り入れることによって、現状に即した柔軟な発想や、専門的な意見（棚田整備など）を取り入れることができた

また、このように地域住民の意欲が高まっていった結果、下記枠内に示す「アザメの会」の発足につながったことも大きな成果といえる。

「アザメの会」の発足

地域による自発的な組織

アザメの会は、アザメの瀬自然再生事業をバックアップするための自治組織で、平成14年12月に地元の佐里下、佐里上、杉野の3区を中心としたグループで組織された。平成17年からはNPO法人として活動を行っている。

人と自然のふれあいの再生

アザメの会の活動としては、堤返し、イダ嵐見学会、相知小学校を対象とした環境学習など（それぞれの内容については第5章を参照）を子どもたちに対して行い、アザメの瀬や松浦川とふれあう活動を実施している。活動には、子供たちの母親や婦人会の方々、公募研究者も加わるなど、人と人のふれあいも活発化している。また、世代間のふれあいや、行政と住民、研究者と住民など、人と人のつながりも生まれている。このようにアザメの会の発足によって、当初の目的であった、人と自然のふれあいの再生が行われている。



アザメの瀬の「これから」を考える 利活用・維持管理

アザメの瀬の利活用・維持管理に関して、現状での問題点から、将来を見据えた方向性まで、アザメの会メンバーの想いを語ってもらった。

（久）「棚田の維持は大変だけど、棚田があるから子どもたちとの交流がある」

（山）田んぼの魚道水路の話だけど、材料に使っている木材は腐るし、組み合わせがずれば水も漏れる。水田の水を抜くのにもうまく抜けず大変。

（梶）擬木を使えば？本物の木は腐ってしまう。

（久）コンクリートを使いたくないので、大きな石を使えば良い。自然再生に石はいい材料だと思う。

（今）材料を一つ一つ試していく中で新たな問題があるはずなので、そこをやり直すとかそういったところを議論する検討会でいいと思う。例えば、みんなで石を積んで作り直すとか。例えば子供達に石を1個ずつ持たせてやってもらうとか。

（九州大学・林氏、以下（林））夏休みの環境学習みたいな感じで、環境学習を冬場にイベントみたいにしてやったら良いかもしれない。大人10人ぐらいだったら九大から参加できる。

（久）アザメの瀬の維持管理については、コンバインやトラクターの用意など全部山口さん1人が受け

持っている。魚道があるから機械が使いづらい。なおかつ棚田なので…。平地だとそういった事はない。それを1人でずっとやっていれば意見があって当然。田



棚田の維持管理をがんばっていただいているアザメの会の山口氏



棚田での田植えの様子（平成21年6月撮影）

んぼの基盤が学校の運動場の様に固くて、水を一気に抜いて田んぼを干そうとしても中々減らない。その辺が色々ある。

また、ため池から田んぼへの水の管理でも、自分だけがやっている。ため池は上と下とあるから、水がいらないから栓をしたり抜いたり度々変わる。

胴長を履いてため池に入らないと寒くて危ないし、水圧が上がる。そういった事も知ってもらわないといけない。

そしてポンプアップして川からも水を運んだり、維持管理は大変だが、棚田が要らないという話が出たわけではない。**アザメの瀬は、棚田があるからこそ生きてくるのであり、交流がある。棚田がなくなると子供達との交流がなくなる。棚田は今後の利活用に必要。**

（今）アザメの瀬は地域の方の協力で利活用や維持管理がうまくまわっている。

（山）出水の後にモニタリング道路に土砂がだいぶんかぶって、滑ってこけたという人が多い。道路を舗装したがために、こけやすくなったのでは？

（今）舗装しないと草ぼうぼうだと思う。魚を観察したい、植物を見たいという意見があって最低限の舗装をした。たぶん、舗装しないと近寄れなかったと思うし、困っているならば再び議論していかなければならないと思う。

（久）健康維持のために散策する人が多いので、ちゃんと検討していかないといけない。

(山) それから、このセンターの倉庫の棚は使いづらい。

(今) でもセンターも元々なかった。これを作るのはすごく大変だった。使いづらいところがあったら、また検討会で話し合って改善していけばいいと思う。作業するときはばくも手伝いに来ますよ。

(山) 棚づくりに？

(今) うん（一同笑い）。

(梶)「小学校との繋がりが利活用のポイントとなっている」

(梶) 相知小学校との連携がなかったらアザメの会そのものがなくなっていた。一番最初に相知小学校に来られた校長先生にアザメの協力をお願いしたら、先生達は忙しくてそんな暇はないと言われ、その時はショックだった。それから次の校長先生には面白そうですねと言われて4年生は生き物調査、5年生になるとアザメの瀬に行き、田植え、田の草取りや稲刈り、収穫などをするようになり、後輩に受け継がれていくようになってきた事がアザメの瀬の一番の成果だと思う。

(添) 他の小学校では、子供達を川に近づかせない学校が多いのに、この地域は川に積極的に近づかせようとしている。小学校は同じ規則なので、クリアすべき問題が当時あったのではないかな？ここは気をつけようとか…。

(久) 当時の相知小の校長先生は、楽しそうだなあ、と言ってくれていた。活動時に気をつけて欲しい所以外は全部アザメの会に任せてもらっていた。



相知小5年生による棚田での稲刈りの様子
(平成22年11月撮影)

(添) 校長先生が変わったらまた一から理解をもらわないといけないのですか？

(久) 実績があるので、初めてくる先生でも、アザメの歴史を知ってもらって活動を理解してもらうようにする。

(久)「アザメの会も後継者を育てていかないといけない」

(山) 維持管理も、高齢化が進んできつくなってきた。若い人に入ってほしい。

(久) アザメの会の人間もバトンタッチ、後継者を育てていかないといけない。10年ステップで考えていかないといけない。だんだん人が少なくなってきた寂しい。

今年の11月に歴代区長会の反省会の中で、アザメの瀬に当初から関わってきた人間がそろそろ作業できなくなってくるという話をしたところ、元区長が協力すると言ってくれた。すごく嬉しかった。地元で頑張ってもらう事が大事。区長が先頭に立って子どもたちと一緒にやってきた事は地域の住民も知っているわけなので、自分たちも頑張らないといけない。また学校との繋がりも大切。

(林) 維持管理の話で、ヤナギの管理が今後大変になってくると思う。5年ぐらい見ているけど、更に大きくなると思う。たぶん当初に考えてたよりもスゴイと思う。管理の良い案を考えないといけない。切って管理することになると思うけど、切った後の枝はどうするか？例えば、餅つきする時に使うとか…。切って捨てるだけというのは良くないと思う。人にとっての活動とか、CO₂が出ないとかを考えた方がいい。

(今) 筑後川では、間伐したヤナギの木を地元の人に自由に持って行ってもらってよい事にした。それに椎茸とかの菌を仕込む。他にも何かに使う人もいると思う。

ただ捨てるのではなく、こういう方向性は大賛成。アザメの瀬には、自然再生と人とのふれあいの2つの目標がある。このヤナギで人とのふれあいができそうな気がする。イベント化しても良いと思う。地元の皆さんが具体的にまとまってくればそういった

事も可能になる。

(梶) ヤナギの管理までは今のアザメの会のメンバーでは無理である。理事長も多忙でほとんど地元にいない。地元の皆さんがある程度まとまってくれば可能かもしれない。理事長が今年中に手を打つ。

(久) 歴代区長会でアザメの瀬継続の話し合いをすることになっている。そういうことになったことだけでもありがたい事だと思う。

(今) アザメを始めた時は3つ地区があった。最初の区長さんのお陰で今のアザメで子供達が遊べるようになったという現実も地元の人達には分かってもらいたい。

(梶) その当時に一生懸命になってくれた人のおかげで、今のアザメがある。

「事務局をしっかりと立ち上げていく必要がある」(梶山)

(梶) 維持管理には、何だかんだいってもお金がいる。管理をしっかりとしなければいけない。事務局をしっかりとしないといけない。

もう一つ、利活用については、子供達がいるから繋がっている。今の教育長が校長先生だったので、そこから繋がりができた。もし、**相知町の小学校の方針が変わってしまったら子供達のつながりがなくなる。これは利活用の大きな要素である。**

自分たちの生まれ育った地域で子供達が大きくなって、子供達がまたその次の世代に伝えていくようにしなくてはならない。

(添) 教育関係の人は意外とアザメの事を知らない。外にPRしていかなければいけないと思う。教育委員会に情報提供をすると一気に広まるのでは？ そうしたら校長先生が変わってもアザメの瀬は続けられると思う。

(梶) 結構、まだ表に出てきていないイベントや活動がある。アザメの瀬は、とにかくイベントが多く、忙しい。

(添) 確かに、これ以上イベントを増やすのは無理。でもちょっと情報を出すと、今のイベントで人がいっぱい来ると思う。

(梶) **事務局をしっかりと立ち上げて、例えば土日祝**

日に自然環境学習センターに人を置いて訪問者を案内できるようにするなどしないといけない。そのためには予算がないといけない。他の会議とかでも情報を流したら良いと思う。来年あたりから頑張ってみる。

(久) 今日は、1回の検討会でとても中身の濃い話をする事ができた。今後、さらに人数が増えるようにご協力いただき、自分達も頑張ろうと思う。

(平成22年12月2日、アザメの瀬自然環境学習センターにて)

【今後の利活用・維持管理】についてのまとめ

■アザメの会による利活用・維持管理

アザメの会によって実施されている利活用は主に以下のとおりである（詳細については「第5章 利活用」、
「第6章 維持管理」を参照）。

【利活用】

環境学習（棚田での米作り、魚捕り）、夏休み環境教室、堤返し、イダ嵐見学会など

【維持管理】

アザメの瀬内の除草・清掃

■利活用・維持管理で抱える課題

第90回アザメの瀬検討会では、アザメの会メンバーから利活用・維持管理における課題として以下の意見が得られた。

- ①利活用の際のトラクターなどの機械を使う作業やため池の管理等は特定の人間に偏っており、個人への負担が大きい。
- ②アザメの会メンバーの高齢化が進んでいることもあり、参加者もだんだん減ってきている。
- ③利活用の大きな柱である「相知小学校との連携」について、小学校の方針に左右される可能性がある。
- ④清掃・除草については、唐津市からアザメの会に委託されているが、今後委託費が削減されていく可能性がある。
- ⑤自然環境学習センターに休日などに人を常駐させ、訪問者を案内できる体制が必要であるが、予算面で困難である。

■今後の方向性（アザメの瀬検討会での意見）

上記の課題に対して、アザメの瀬検討会で出た意見は以下のとおりである。

- ・（①、②に対して）後継者の育成が必要である。これについては歴代区長会で協力を呼びかける予定である。
- ・（③に対して）教育委員会に活動内容をPRし、小学校との連携を安定化させる。
- ・（④、⑤に対して）各方面へのPRを行い、予算を確保する。

利活用・維持管理の主体となっているアザメの会では、課題への対応策を模索している。今後のアザメの瀬の利活用・維持管理には地域住民の協力が不可欠であり、アザメの瀬周辺住民への働きかけが必要である。

アザメの瀬自然再生事業では、計画・整備において検討会の場で徹底的に話し合い、事業をより良い方向へと導いてきた。今後の利活用・維持管理で抱える課題についても、地域の多様な主体を取り込み、話し合いを続けて解決していくことが必要である。

■アザメの会によって実施されている主な利活用

環境学習	総合学習の一環として主に地元の唐津市立相知小学校の児童を対象に平成 17 年から継続して実施されている。棚田整備後の平成 18 年以降では、アザメの瀬内の棚田での田植えに始まり、田の草取り、稲刈りまでを行ったり、魚捕りなどを行っている。これらの活動は武雄河川事務所とアザメの会とが連携して行っている。	
夏休み環境教室	アザメの瀬の体験型学習の一環として、主に地元の児童を対象に平成 20 年から継続して実施されている。活動内容はアザメの瀬に生息する魚類や植物、昆虫類などの観察を行い、とりまとめ結果を児童らにより発表するものである。武雄河川事務所とアザメの会、九州大学が連携して行っており、佐賀市内や福岡県からの参加者がいるなど好評である。	
堤返し	ため池等を干し上げて、水位を下げることによって水質や池底の浄化等の維持管理を行うことを堤返しと呼ぶ。 水位が下がることにより、魚類の捕獲が容易になるため、アザメの会では平成 15 年から児童を招いて魚採りが行われている。その後に振舞われる料理も好評であり、継続して実施されている。	
イダ嵐見学会	春一番が吹くと、イダ（ウグイ）が産卵のために海から川へと遡上を行う現象をこの地域では、イダ嵐と呼ぶ。 アザメの会が中心となり、伝統行事としてのイダ嵐の見学会を平成 15 年から実施している。投網講座やアザメの会によるイダの料理のもてなしなどを行っており、好評な企画である。	

■アザメの会によって実施されている主な維持管理

アザメの瀬における除草、清掃などの日常的な維持管理については、NPO 法人アザメの会により実施されており、国は洪水後の土砂撤去や破損箇所の補修などの大規模な補修作業のみ実施している。またアザメの瀬内の棚田、自然環境学習センターについては、唐津市と管理協定を結び管理している。